

原発 ゼロ にむかって

2012年8月15日 No.29

<http://www.tokyoiminiren.gr.jp/>

編集・発行／東京民医連事務局 tel : 03-5978-2741 fax : 03-5978-2865 mail : sien@tokyominiren.gr.jp

●「おもいきり遊べてとても楽しかった、また来たい」と満面の笑顔を残して福島の親子46人は7月30日の午後立川をあとにしました。立川で取り組まれた“すまいる×すまいる”プロジェクトへ7月28日の午後福島親子が貸切バスで立川に到着しました。その後大山小学校にて歓迎



セレモニーとゲーム、夜は屋上で花火大会観賞、次々に打ち上げられる大輪の花弁に「すごい・きれい」と歓声とため息。7月29日は昭和記念公園の子どもの広場とレインボープールです。ハンモックとトランポリン遊びに汗と笑顔がはじけます。プールでは「こんな大きいのはじめて」と水しぶきがあがります。7月30日は竹トンボづくりとバーベキューです。竹トンボは初めての人でもすぐ覚えて、大空へ飛ばします。バーベキューは立川産の野菜が「おいしいおいしい」と大好評でした。未就学児二人を連れて参加したお母さんは「子どもたちが指折り数えて立川に来るのを楽しみにしていた、飛び跳ねている子どもの姿をみて本当にうれしい」と話していました。また、お母さんがたは「食べ物には気遣います。立川の野菜は新鮮で安心して食べられる」と口を揃えて言っていました。ボランティアで参加し、バスで福島まで付き添った三多摩健康友の会員の大神田さんは「3日間子どもたちの笑顔がすてきでした。福島に帰ってもこの笑顔を忘れないでほしい」といいます。健生会からはボランティアで助産師、看護師、看護助手、事務の人たちが参加しましたが「子どもたちと一緒に遊べたことがなによりもうれしかった、来年も参加をしたい」という声が多数ありました。 ■■■ 高橋利行(「健康のいずみ」編集事務局)

●原発被害の現状を直接現地で学ぼうと、1泊2日という短期間のフィールドワークでしたが7月22日に医学生2人と福島に行ってきました。南相馬で三浦広志さん(福島県農民連・浜通り農産物供給センター代表理事)と合流し、まず、4月16日に警戒区域解除となった20km圏内に入り市街を車上から見て回りました。(立入りはできるが宿泊はできない)南相馬では今年度、作付を行わないことを市として決めていたため、ほとんどの田畑が雑草しか生えていない状況で、(集落ごとの汚染データをとるために試験的に栽培している田畑はあり)市街には、地元の馬追い祭りが7月下旬に行われるため、ところどころで倒壊した家屋を片付ける作業者がいるものの、それ以外には人気はありませんでした。浪江町との境にある吉沢牧場では、三浦さんから「震災後5日程度避難して家を空けたために、

乳を絞ることができず病気になった牛などを処分せざるを得なかった」「牛は一度乳を止めると次に出すまでにもう一度妊娠させることが必要のため機械のようにはいかない、田畑も同じ」という話を聞きました。三浦さんからは最後に、「小高や浪江の地区では、原発の受け入れを止めたが、双葉地区では受け入れてしまった。しかし、これは地域が悪いというのではなく、貧しい地域を狙って原発を立地してきた国の政策の責任。再稼働反対だけでなく、燃料棒を抜かせ廃炉していくための運動が今だからこそ必要」というメッセージがありました。

■■■ 秋山道宏(小豆沢病院医学生担当)



原発被害の現状を現地で学ぶ